

# きずな

いのち。つながるマガジン

Vol.3

2012.1







いのち  
であう  
わかれる  
でも  
つながってる  
ずっと。  
いのち  
あいしあう  
にくしみあう  
でも  
つながってる  
ずっと。  
いのち  
うまれる  
しんでゆく  
でも  
つながってる  
ずっと、  
ずっと。



# ボク

瓶ノ中

——ライ園標本室——

ホルマリンニ浸ッテ

モウ ドノクライ絳ッダノダロウ

手ノヒラハ ツイニヒラカブ

ヘソノ緒ヲ浮カン

ウツラウツラ眠リ呆ケテ

四十年

「モー イイカイ？」

「マー ダダヨ！」

未来永劫

育タナイ ボク

ラッキョウウミタイナ

オチンチン

ボクノ

オトツツァンヨ

オツカサンヨ

ライハ

イッタイ

イツ終ルノデスカ!?



シリーズ  
いのちのかたち

「ライは長い旅だから(皓星社)」より  
詩/笹 雄二 写真/趙 根在  
1969年 栗生楽泉園



# 奪われた存在

ハンセン病—終わらない隔離の果てに



## 国立療養所

群馬県・草津温泉—日本の屈指の名湯には、毎日大勢の湯治客や観光客が訪れる。豪快に湯が流れ出る湯畑の周辺は、湯もみ唄とカラコロという下駄の音が響き渡り、温泉街特有の華やかさにあふれている。そんな喧騒を抜け、車で五分も行くと人影や建物はまばらとなり、道は静かな雑木林の間を走る。薄暗い木立の間からは火葬場や墓地がのぞき、当然ながら湯治客や観光客の姿は皆無となる。さらに先の木立が開けた所に、ひっそりとした石造りの門柱が現れる。道は門の奥へと吸い込まれるように消えているが、辺りに建物らしきものは見当たらない。左右の門柱にはそれぞれ、「国立療養所」「栗生楽泉園」と書かれている。

白根山の麓、標高一〇〇mの高原に七三万三二五三平方メートル(約二二万坪)の敷地を持つ「国立療養所栗生楽泉園」は、全国に一三か所ある国立の「ハンセン病療養所」の一つだ。ハンセン病は、一八七三(明治六)年にノルウェーの医師アルマウエル・ハンセンが発見した「らい菌」という細菌に感染することで起こる病気だが、その感染力は極めて弱く、たとえ感染したとしても、現在の日本のような環境において発病する例はほとんどない。また七〇年近く前にプロミンという特効薬が開発されて以降、様々な治療薬が開発され、ハンセン病の治療法はほぼ確立されたといつてよい。つまり、ハンセン病は治る病気なのである。

かつて不治の病として恐れられた結核やコレラのように、感染力が極めて強く、死亡率が高い病気の場合は患者を隔離する必要もあり、専用の隔離病棟や療養所などが存在していたが、治療法が確立され罹病率が低下した現在、それらの治療が一般の病院内で行われている事に何の疑問も感じない。しかしハンセン病だけが、今もこのように巨大な専用施設の存在を必要としているのは、なぜだろうか。

それは、国がハンセン病患者に強いてきた、九〇年にわたる過酷で悲惨な強制隔離の結果である。隔離はハンセン病に対する差別や偏見を生み出し、患者や回復者<sup>※2</sup>たちからその人生や故郷を奪い、人間や命の尊厳を奪い、存在そのものを奪ってしまったのだ。そして、隔離政策が終わってもなお、全国の療養所では多くの人々が帰る場所を失ったまま、私たちが知ることのない、社会と隔絶された世界で生きている。隔離が生み出したこの遠大な人造物たちは、この国に深く根を下ろした暗く長い隔離の歴史を物語る、黒く巨大な墓標のように、私たちの心に重く圧しかつている。

## 止まったままの時間

療養所の広大な敷地には大小様々な建物が立ち並び、その間をきれいに舗装された道路が縦横に走る。それはひとつの街のようでもある。しかし、ここには人がつくり出す景色の動きや喧騒といったものは感じられず、風景とは見合わない静寂がこの街を包んでいる。まるで時が止まってしまったかのようにすべてがじっとして動かず、そして静かだ。断続的に聞こえてくる視覚障害者を誘導するための人工音だけが、ここに人の暮らしがあることを知らせてくれている。

栗生楽泉園は長島愛生園(岡山県)に次ぐ第二の国立ハンセン病療養所として一九三二(昭和七)年に開設された。それまで、草津町内の湯之沢<sup>※1</sup>部落には、多くのハンセン病患者が集まっていたため、その移転先として療養所の設立が計画され、その後の「無癩県運動」<sup>※2</sup>などの隔離強化によって多くの患者が収容された。最も多かった一九四四(昭和一九)年には、一三三五名が収容されていた。一九三八(昭和一三)年には患者刑務所である「特別病室」がつくられ、全国の療養所の患者たちから「草津送り」として恐れられ、後に多くの患者が獄死した。この特別病室の存在が、重苦しい脅威として常に入所者たちを押しつけていたことは言うまでもない。

開設から八〇年近くが経ち、かつて一三〇〇人を越えた入所者も、今は一三〇人余りと一〇分の一にまで減少した。軽快して社会復帰した者もわずかにはいたが、ほとんどがこの療養所の中で亡くなっている。生存している入所者の平均年齢も八二歳を超えており、その多くも高齢などにもない介護や入院を必要としている。暗く長い療養所の歴史の中で、それでも人間らしく必死に生き抜こうとした数

- ①全盲詩人の桜井哲夫さん(園名)は、最近、長峰利造の本名で詩集を出版した。
- ②多い時には1300人以上の患者が収容されていたが、再びこの門を出て社会復帰した者は少ない。
- ③日中も敷地内の道路を通る人はほとんどいない。
- ④不自由者棟には障害が重く介護を必要とする入園者が入居する。
- ⑤一般舎には比較的障害が軽く、自立可能な入園者が入居する。
- ⑥園内には各宗教の教会や寺院などが建てられている。
- ⑦「特別病室(重監房)」跡。ここで22名が獄死した。



多くの入所者たちの活気も、今や園内の資料館に展示された遺物にしか見ることができない。全国の療養所が、近い将来すべての入所者がいなくなる「その時」が訪れるのを静かに待っている。

楽泉園の入園者自治会長、藤田三四郎さん(八五歳)と、副会長の紺雄二さん(七九歳)は、長年に渡り自治会の活動に携わってきた。それは、人権回復、待遇改善、隔離撤廃などを国や施設、社会に訴え続けた闘いの歴史でもあった。彼らのような全国の入所者による、命がけの闘いの末、一九九六(平成八)年、「らい予防法」<sup>※3</sup>が廃止され、九〇年に渡る隔離政策がようやく終わった。しかし、長年の隔離がもたらした差別や社会との断絶は絶望的なまでに深く、ほとんどの入所者が故郷に帰ることができないまま、残された人生をこの療養所で過ごすことを余儀なくされている。療養所での最低限の生活こそ保障されているものの、奪われてきた人生や人間としての尊厳を取り戻すことは容易ではない。「国はただ、自分たちが死ぬのを待っている」と、藤田さんたちは言う。入所者自身が声を上げない限り、国や社会は何もしてはくれないし、入所者の置かれた現状は何も変わらないまま、やがてはその存在すら忘れ去られてしまう。すべてのハンセン病患者・回復者が何の障害もなく社会や故郷に受け入れられ、人間として当たり前の生活ができなければ、隔離政策の真の終わりとは言えない。しかし、高齢の入所者たちにとって残された時間はあまりに少ない。残酷に過ぎてゆく時間に追われながらも、眼光未だ褪せない二人の老闘士の闘いは続く。

二〇一一(平成二三)年二月一日現在、楽泉園の入所者数は一三八名、平均年齢は八二・八歳、平均在所期間は五八・八年、設立以来の死亡者数は一九七一名、そのうち引き取られず療養所に残されている遺骨は一七〇〇体以上。

※1 古来、草津には湯治目的で多くのハンセン病患者が集まっていたが、明治になると温泉地発展の妨げになるという理由から、温泉の中心地から排除された患者が「湯之沢」に集落を拓いた。1916(大正五)年、湯之沢にやって来たキリスト教の宣教師コンウォール・リーが、「バルナバ病院」を始めとする、ハンセン病患者救済のための施設を設立。多い時には800~1000人の患者が集まっていた。しかし地元草津から、再三に渡り集落移転の要請が出され、1941(昭和16)年、湯之沢は解散させられた。

※2-3 13~14ページ資料を参照。

※1 現在、国内には国立療養所以外に2か所の私立療養所がある。

※2 ハンセン病が治癒した元患者。入所者・退所者・非入所者を含む総称。





①長野県上郷村出身の丸山さん(84歳)は楽泉園に入所して60年以上がたつ。  
 ②丸山さんは14歳頃に発病、同級生たちは皆兵隊に行った。  
 ③25歳の時、同じ入所者の房子さんと結婚。療養所で50年の苦楽をともにした。

「丸山さんいる？」障子越しにたずねると、「いないよお」と、ぶっきら棒な声が返ってくる。障子を開けると、白髪の男性が人懐っこい笑顔をこちらに向けて座っている。こたつが置かれた六畳ほどの居間はきちんと片付けられていて、八十過ぎの男性の独り住まいとは思えない。柵の上に置かれた仏壇には、両親と妻の写真が飾られている。こたつの上で組んでいる右手の指は五本とも第二関節ほどしかなく、残された部分も不自然に曲がっている。しかし、そんなことを気にする風もなく、「今日は何しにきたんだい？」と、わざととぼけて聞いてくる。「だから今日は丸山さんの話を聞きたいからって、連絡したじゃないですか!」「そうかあ。まあ、いいや。お茶でも飲もうや」と、家を訪ねるといつもこの「丸山さん節」に乗せられて会話が進んでゆく。皆から「丸山さん」と呼ばれている丸山多嘉男さん(八四歳)は、一九二七(昭和二)年、長野県上郷村(現在は飯田市)で生まれた。一九四九(昭和二四)年、二二歳の時に強制隔離によって栗生楽泉園に収容されて以来、六十年以上をこの草津の山尾根に開かれた療養所で暮らしてきた。丸山さんは一四歳の頃にハンセン病を発症、朝目を覚すと右手の自由がきかなくなっていた。病院へ行くと、「うちへは、あがっちゃいかん!」と言われ、そこから県へ連絡が行き、医者との職員がやって来て調べ、草津へ行くようにとだけ告げられた。しかし、しばらくは親が引きとめてくれ自宅で療養していた。一七歳の時に徴兵検査があったが、「きさまは戦争が嫌で無理にそういう手にしたのだろう!そういう国賊みたいなやつはなあ、本土決戦のときに弾除けに使ってやるから覚悟しろ!」と皆の前で怒鳴られた。また、選挙に立候補する親戚から、「手を切り落としてくれ!」と頼まれたこともあった。同級生たちが志願して兵隊に行くのに自分だけが残ってしまい、生きているのが惨めで死のうと思つたことも何回かあった。ところが不思議なことに、死のうと思つて行った場所には必ず母親が待っていた。そんな事が三回くらい続き、とうとう死ぬことが出来なかった。そんな時に新聞配達の話がきて、「仕事ができたら生きられる!」と思ひ懸命に仕事に打ち込んだ。そして役所からの度重なる勧告もあり、二二歳の時に楽泉園へ入所した。お召し列車」といわれる貸し切り列車に、他のハンセン病患者七人とともに乗せられて故郷を後にした。丸山さんが連れて行かれると、自宅は徹底的に消毒された。長野駅ではホームに白墨で二本線が引かれていて、そこからはみ出さないように歩けと言われ、貨物専用の出入口から外に出された。その日は長野日赤の伝染病棟で一泊し、出る時には遺体の搬送口から外に出された。翌日、草津駅に着いた途端、待ち構えていた職員によって電車は消毒された。二年もすれば家に戻れると思つて来た療養所だったが、入ってすぐに医者が右手



①入園者自治会長の藤田さんは85歳、副会長の笈さんは79歳。二人の長年に渡る人間回復のための闘いはまだ終わらない。  
 ②入所者の平均年齢は82.7歳。その多くが介護などを必要としている。  
 ③園内には主を失った家も目立つ。  
 ④園内唯一のショッピングセンターには、生鮮食品や生活雑貨が並ぶ。  
 ⑤4か所の共同浴場には温泉が引かれ、誰でも利用することができる。

### 失われたふるさと

を見て、「ああ、やっぱりダメだなあ」と言うのを聞いて、自分でも治らない病気のだと覺つた。入所時には、「園名を名乗る」「宗教に入る」「解剖承諾書へ署名する」ということを勧められたが、いずれも断つた。入居させられた部屋は独身者用の雑居部屋で、冬は隙間から雪が吹き込み、寝ている間に顔に積もった雪が融けてびしょ濡れになった。入所した当時、すでにプロミンの治療が始まっていたが、丸山さんは一回も治療を受けることはなかった。後でわかったことだが、丸山さんの病気が入所する前にすでに自然治癒していたらしい。二五歳の時、同じ入所者の房子さんと結婚するが、法律によりハンセン病患者や回復者が子供を生むことは禁止されていたため、断種手術<sup>※2</sup>を受けなければならなかった。しかし房子さんと一緒にされる喜びもあり手術を受けた。園内での結婚式は紅白饅頭と沢庵漬だけの粗末なものだった。そして、結婚後は死にたいという考えはなくなり、生きなければと思うようになった。入所者の労務外出が許されるようになると、昭和三七年からは草津の町で土方の仕事をしたり、旅館で帳簿係として働いたり、ホテルのフロント主任や総務部長を長年努めたりもした。また後になって入った天理教会では、バスをチャーターして二十数回も教会の仲間を連れて、本部参拝の旅行に出掛けたりもした。二〇〇二(平成一四)年に五〇年をともにした妻房子さんが亡くなった。房子さんは亡くなる時に、「マルさん、楽しい五〇年だったねえ」と言ってくれた。今でもよく房子さんのことを思い出しては、本当に愛していたんだと強く感じるという。その後、実家を継いでいる姪の勧めもあり、二〇〇三(平成一五)年に故郷で生活することを決意し、実家近くで一人暮らしを始めた。しかし、故郷を離れた五十余年の歳月は余りに長く、簡単には埋めることはできなかった。心労もあり体調を崩して三か月で療養所に戻った。今は、房子さんと過ごした思い出がたくさんあるこの療養所で暮らしたいと、姪たちには言っている。

私たちが療養所を後にする時、丸山さんは「もう、来なくていいよ」などと冗談を言っていて、いつも笑顔で見送ってくれる。遠ざかってゆく丸山さんの姿を見つめながら、療養所で一人過ごす圧倒的な時間を、丸山さんは何を思いながら過ごすのだろうと、ふと想像することがある。

丸山さんは、数年前から故郷の長野県内を中心に各地で講演活動などを精力的に行い、自分のこれまでの経験や感じていることを多くの人に伝えている。それまでは、自分のことを他人に話そうなどとは思ひもなかったというが、昭和二十四年一月一九日の毎日新聞(長野県版)の記事に「ライ患者一掃 まず八名収容」と、自分の事が書かれているのを見つけ、「一掃」という言葉を見て、「おら、ゴミじゃねえ」「黙ってちゃダメだ」と思うようになったという。

丸山さんが話をする相手は小学生から大人まで幅広く、ハンセン病について初めて話を聞く人や、元ハンセン病患者に初めて出会うという人も多い。その中には不安や戸惑いを感じている人

は消毒された。二年もすれば家に戻れると思つて来た療養所だったが、入ってすぐに医者が右手

※1 入所3点セットとも言われ、戦前は患者たちに強要されていたこともある。「園名」は、実名を隠し故郷の家族や親戚に迷惑が掛からないようするために名乗った。また「宗教」は、死亡時にいずれかの様式で葬式を行うためであったが、さらに宗教的救済を利用して、患者に隔離の現状を受け入れさせるといった理由もあった。そして「解剖承諾書」は、死亡してもほとんどの患者が家族などに遺体を引き取れることがなかったためである。  
 ※2 13~14ページ資料を参照。





入所者から「フー子ちゃん」と呼ばれる門屋さんは、どこに行っても人気者だ。

「おお、フー子ちゃんかあ」「さあ、あがって、あがって！」フー子ちゃんはどこに行っても人気者だ。療養所で顔見知りの入所者の居室や病室を次々と回っては、その先々で歓迎を受ける。挨拶もそぞろに部屋に上がり込むと、すぐに座り込んでおしゃべりを始める。出された食べ物や飲み物は遠慮なくいただき、散々しゃべったり笑ったりしたかと思うと、いきなり寝転んでスヤ

### 故郷の風をはこぶ人

森下しげさん(九五歳)は、一九一六(大正五)年、長野県生まれ。一九四七(昭和二二)年に楽泉園に入所。製糸工場で働いていたが、手の感覚がなくなり働けなくなった。結婚はしていたが、夫は終戦後、家に戻らないまま病死した。葬式の後、いきなりやって来て家中を消毒する役場の職員と言い争い、そのまま家を出て草津へ行った。しばらくは草津の旅館で働いていたが、医師の紹介もあり楽泉園に入所した。解剖承諾書には署名したが、園名は使わなかった。自分の力では生活もできず、ここで病気を治さなければと思ひ、あきらめて六十年以上を療養所で暮らしてきた。親が亡くなったとき知らせはあったが、醜い姿を見せたくないと思ひ、葬式には行かなかった。療養所内で結婚したが、規則で子供を産むことが許されなかったため、夫は断種手術を受けた。園内では不自由者を看護する仕事を長年やり、一日八錢ほどの手当てをもらっていた。その後、病気の後遺症で全盲となり、夫も数年前に亡くなったが、真言宗の信仰を支えに一人で生活をしてきた。数年前、長年住んでいた居住棟が取り壊され病棟に入れられると、すっかり元気をなくしてしまい、一日のほとんどをベッドの上で過ごすようになった。普段は無表情でほとんど言葉を発しないというのだが、私たちが長野から来たことを告げると、急に起き上がって笑顔になり、達者な南信なまりで話し出した。そして、終わらない話をささぎって帰ろうとする私たちの手をしっかりと握って、離そうとしなかった。

楽泉園には多い時に約七〇名の長野県出身者が収容されていた。現在は八名が入所しており、そのうち四名が高齢または後遺症などによる障害のため、園内の病棟などで暮らしている。



①②長野県出身の中村さん(②写真下中央右)は、患者だった両親と入所。未感染だった。  
③④中村さんは敬虔なクリスチアンだ。冬期間は毎週自宅に信者を集めミサを行う。  
⑤森下しげさん(95歳)は全盲だが、長年一人で暮らしてきた。



### 故郷に自分の存在を知る人はいない

中村教良さん(仮名)は、七六歳。現在楽泉園に入所している長野県出身者の中では最年少だ。一九四〇(昭和一五)年、五歳の時にハンセン病患者だった両親とともに湯之沢へ移住し、一九四二(昭和一七)年、湯之沢が解散すると、感染していなかった中村さんは、療養所に隣接する未感染児童のための保育所に入れられた。保育所では親子であっても面会は制限された。九歳の時に父親を亡くすが、その時には死に目には会えなかった。一人息子だった自分を父親はともかわいがってくれ、よく肩車してくれたことを覚えている。父親の死後間もなく発病し、療養所内の学校に通った。一九歳の頃までは体も弱く病気も進み、二十歳まで生きられないと思っていたが、治療薬の効果で症状は治まっていった。園内では新聞配達から歯科技工助手、養豚場で、数々の患者作業に携わった。また労務外出が許可された一九六二(昭和三七)年頃からは、園外で土方の仕事などをした。園内の作業にくらべ給料も良く、それまで外で仕事したことがなかったのが、嬉しくて人の倍くらい働いた。そのお陰で二、三年働くとテレビも洗濯機も冷蔵庫も買えることができた。しかし結局体調を崩してやめてしまった。結婚はしなかった、というよりも出来なかった。園内では女性の割合が少なく、結婚できる者は限られていた。三五歳を過ぎて自動車の運転免許を取って日本中を旅して回ったが、近年視力が低下したため免許を更新できず、今では電動カートで草津の街へ出るくらいしかできなくなった。

中村さんはキリスト教の信者で園内にある聖公会の信徒代表を二十年以上務めている。しかし、近年では毎週教会で行われる礼拝に参加できる人も減ってしまい、冬場は自宅に数人の信者を集めて礼拝を行っている。療養所内では自殺をした人も多く、中村さんの知り合いも大勢自殺したという。昭和三七年頃までは療養所内で人が亡くなると、入所者自身で園内にある火葬場で遺体を焼いていた。七、八時間かけて焼くが、解剖された遺体にはガーゼなどが詰まっていた中々焼けなかった。同じ園内に暮らしていた母親は十数年前、八八歳で亡くなった。一人暮らしの中村さんの家を訪ねるといつも、買いためてあるカップラーメンやパン、各地の

知人から届いた珍しいお菓子などをたくさん出してくれる。そして、多くの信州人がそうするように、中村さんはお茶を何杯も継ぎ足しながら、昔のことも詳細に覚えていて、写真や地図などを引っぱり出さずには色々話してくれる。中村さんが入所して七〇年以上が経つが、実家はすでに跡形もなく、故郷に自分の存在を知っている人もいないという。それでもどこからか自分のことが知れて、迷惑が掛かるかも知れないと思ひ、これまで親戚に連絡を取ったことはない。毎日届けられる故郷の地方紙の死亡欄に目を通しては、知っている名前がないか確かめるのが日課となっている。





彼らの存在を取り戻すことは、私たちの命の真実の姿を取り戻すことでもある。

じられない、かつて子供の自分が見ていた、古い人間が持っている、真っ直ぐな言葉とか、寛容な眼差しとか、揺るぎない佇まいたてまいのようなものだ。それは、現代の人間が大切に守っている「アイデンティティ」とか「イデオロギー」といったものとは無縁の、もっと大きな「何か」とつながって生きている命の持つ、素直で、温かくて、力強い安心感である。彼らは、外の世界の良識や価値観、権利や尊厳など通用しない「療養所」というタイムカプセルの中で、私たちがはまったく異なる時間と空間を生きてきた。現代の社会では、あふれるモノや知識にすっかり埋もれて見えなくなってしまう、私たちの命が本来持っている大切な「何か」が、彼らの中には生き生きと息づいている気がする。

過酷な隔離の中で、「生きる」ということ以外を極限まで削ぎ落としてきた彼らは、むき出しの命をさらけ出し、あるがままの命として「生きる」ということを私たちに見せてくれている。彼らと過ごす時に感じる不思議な喜びとは、彼らが人間として生きるために、最後まであきらめずにその命の中に残してきた、むき出しの「慈しみ」に触れたゆえの感情なのだろうか。そして、彼らのもつ慈しみが私の心を開かせ、あるがままの命と命の出会いが、こんなにも安らぎと喜びに満ちているということに気づかせてくれる。「慈悲」と言われるように、深い慈しみとは、深い悲しみから生まれる。彼らが背負ってきた想像もつかないような、失望、怒り、恨み、痛み、悲しみ・・・そんなどうしようもない感情を、のたうち回りながら、うめきながら、狂いそうになりながら、気の遠くなるような時間を掛けて、細胞の一つ一つに溶かしこみ、自分の血肉や命にしてきたであろう彼らだからこそ、自分を虐げ排除しいたしてきた者の命でさえ、自分の命と同じように悲しみ、慈しむことができるのではないだろうか。

私たちの社会は、自分に都合の良い「光」ばかりを求め、都合の悪いものを「影」として社会や意識の外に追いやり見ないようにしてきた。本来、光と影は一体であるように、あらゆる存在が混在しながらこの世界はできている。だから「影」を否定し排除する世界は、あまりに不自然で生き苦しい。私たちが排除し忘れ去ろうとしてきた、ハンセン病患者や回復者たちの存在とは、本来、この社会やこの国にあるべき、もう一つの存在だったはずである。私たちが奪ってきた彼らの存在こそ、私たちが失ってしまった大切な「何か」だったのではないだろうか。彼らの「奪われた存在」を取り戻すということは、私たちの社会が失ってしまった、もう一つの世界の姿を取り戻すことであり、私たちが失ってしまった、自分自身の真実の命の姿を取り戻すことでもある。つまりそれは、この世界に存在するすべての命が、つながりあい、願いたい、生かしあう「ひとつの大きな命」として生きる喜びと輝きを、この手の中に取り戻すことではないだろうか。



楽泉園の納骨堂には、故郷に帰ることのできない遺骨が1700体以上納められている。

スヤと寝息をたて始める。それが「プー子ちゃん」だ。

プー子ちゃんとは、坂城町に住む主婦、門屋和子さんのことだ。門屋さんがなぜ入所者たちからそう呼ばれているのかというと、療養所に「風のようにやって来ては、気持ちのいい風を吹かせて、また風のように去って行く」からである。門屋さんは時間さえできれば車で片道一時間ほどの楽泉園に足を運び、入所者たちとともに過ごす。時には入所者を自分の家に招いたり、一緒に旅行に行ったりするなど、家族ぐるみでの付き合いをしている。こうした活動は二〇〇三年頃から始め、楽泉園にとどまらず全国や世界のハンセン病患者・回復者とも交流がある。

彼女のハンセン病との出会いは、宮城県の実家で彼女が小学生になる前から、母親がハンセン病患者たちを連れて来て世話をしていたことに始まる。国の隔離政策が進められる中、母親は独自にハンセン病について調べ、この病気が世間で言われているように恐ろしいものではなく、隔離の必要がないことも知っていた。

彼女が出会ってきた患者や回復者たちは、「隔離政策によって過酷な人生を強いられながらも、その怒りや恨み、悲しみといったドロドロとした感情を、六〇年、七〇年という長い歳月をかけて、一滴一滴ろ過してきた真水のような心を持った人たち」であるという。そんな人たちに会った喜びをより多くの人に伝えたいという思いで活動を続けている。しかし、ハンセン病に対する偏見は今も根強く残っており、以前住んでいた長野県内のある町では、自宅に入所者を招いたことを知った近所の住民から、「とんでもないことだ!」と激しく非難された。住民たちの前で謝罪させられて出て行くように言われ、逃げるようにしてその町を出たこともあった。それでも自分が療養所を訪ねると、「ふるさとが訪ねてきてくれた」と入所者たちは喜んでくれ、「故郷の地に触れるように自分の手を握ってくれるから」と活動を続けている。

二〇〇八年には「ハンセン病に関わる長野県民の会」を立ち上げ、ハンセン病患者・回復者と故郷の人々との橋渡しをして、交流と理解の輪を広めるとともに、一人でも多くの患者や回復者が生きて故郷の地を踏めるよう、各地を「風」のように飛び回っている。

**私たちが失った「存在」**

療養所での入所者とともに過ごす時間はいつも不思議だ。彼らのことを神聖化したり、彼らとの出会いを美化したりするつもりはないが、彼らといるとなぜか、何かに包まれている安らぎと、自分の奥の何かが満たされていく喜びを感じる。

彼らにはある共通した懐かしさがある。外の世界に生きる彼らと同世代の人々にはもはや感



# ハンセン病って知ってる?

## 1. ハンセン病ってどんな病気?

ハンセン病は、「らい菌」という細菌に感染することによって引き起こされる細菌感染症です。感染後平均3年、時には20年という時間の経過の後に、皮膚や神経に症状が現れてきます。治療が遅れると手足や顔面などに変形などの後遺症を残すことがありました。昔前は「らい病」と呼ばれていましたが、1873年にらい菌を発見したノルウェーの医師アルマウエル・ハンセン氏の名前をとって、現在は「ハンセン病」と呼ばれています。

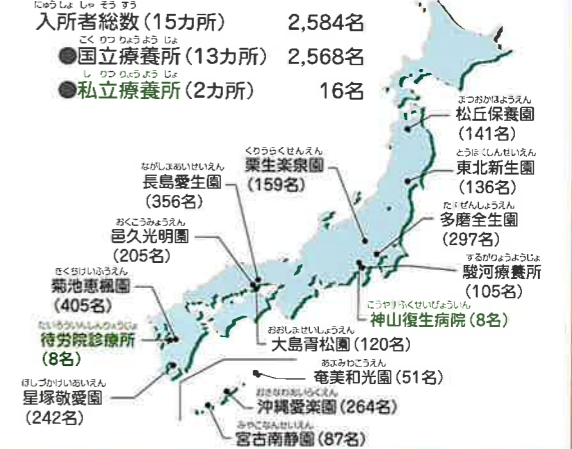
## 2. 誰でもハンセン病になるの?

ハンセン病は遺伝病ではありません。また、らい菌は感染力がとて弱いため、ハンセン病は非常にうつりにくい病気です。たとえ感染しても、ほとんどの方が自然に治るため、発病することは極めて希です。人類はこの病気に長い間苦しめられてきましたが、現在の日本では公衆衛生の改善や良い治療薬の登場などによって、日本人の新規患者数は1年間に数名程度になりました。

### ハンセン病療養所 全国配置図

(平成21年5月1日現在)

入所者総数(15カ所)	2,584名
●国立療養所(13カ所)	2,568名
●私立療養所(2カ所)	16名



## 3. ハンセン病は治らない病気なの?

ハンセン病は不治の病という考えが長らく主流を占めていましたが、1943(昭和18)年アメリカで合成され治験された新薬のプロミンは、ハンセン病にとっても効果があると報告されました。1949(昭和24)年から日本でも広く新薬を使用するようになり、現在は3種類の飲み薬を併用する治療が行われています。ハンセン病は早期に発見することで、感染しても皮膚科などへの外来通院で完治できる病気です。

厚生労働省発行「ハンセン病問題を正しく伝えるために」より引用

### 隔離政策

かつて「癩(らい)」とも呼ばれていたハンセン病は、皮膚の変形や手足の指の欠損といった後遺症を伴う患者の外観から不治の病と考えられ、日本では古代から近代に至るまで、業病<sup>1</sup>や天刑病<sup>2</sup>、または遺伝病<sup>3</sup>として忌み嫌われ、世間から蔑視と差別の対象とされてきた。こうした世間の目を避け、患者は家の中で隠れて暮らすか、家を出て放浪したり神社仏閣の門前などで物乞いをしたりして暮らしていた。明治維新当時、このようなハンセン病患者に対する救済は、欧米のキリスト教の宣教師らによって開設された施設<sup>4</sup>などに依存していた。

一八九七(明治三〇)年、第一回国際癩会議で、ハンセン病が感染症であることが認められると、政府は一九〇七(明治四〇)年、「癩予防二関スル件」という法律をつくり、放浪や物乞いをして生活する患者の強制隔離を始めた。しかしこの時の国際会議では、同時にハンセン病の感染力が極めて弱いことも報告されており、それにも関わらず国が強制隔離を行ったのは、日本が欧米諸国のような近代国家仲間入りを果たすうえで、当時全国に三万人以上いたとされるハンセン病患者が、街中で放浪や物乞いする姿は「国恥」と考え、欧米人の目から隠すためであった。

人里離れた山中や離島に設けられた療養所に隔離された患者たちには、劣悪な環境下での重労働が強いられ、症状が悪化する者も多くいた。逃走防止のため金銭は没収され、一園内通券<sup>5</sup>の使用が強要されたり、逃走しようとして、職員に反抗的となされたりした者には、所長の判断で監禁・減食・謹慎などの懲罰が科せられることが認められ、そのため療養所内には監禁所が設けられていた。栗生楽泉園には「特別病室」という名の「重監房」までつく

### 無癩県運動

一九三二(昭和六)年には「癩予防法」が制定され、家で療養するハンセン病患者も含めすべての感染者が隔離の対象となった。より多くの患者を徹重に隔離するため療養所は国立化され、以後大規模な療養所が各地につくられていった。また「無癩県運動」も全国で活発化し、患者のあふり出しが行われ、隣人による密告や警察による患者狩りなどが各地で繰り返された。新聞やラジオなどのマスメディアは、ハンセン病が恐ろしい伝染病であるという宣伝をし、各地の無癩県運動の成果を称賛する記事を掲載して、隔離政策を正当化する世論をつくりあげた。「三井報恩会」など財界の協力団体からは資金が提供され、隔離政策の財政基盤となった。また、各宗教団体も積極的にこの国策に協力し、キリスト教者の「日本M.T.L」や真宗大谷派の「光明会」などは、皇族がハンセン病患者に同情して詠んだ歌などを採り上げ、憐れな患者を、隔離施設に入れることが患者の救済であるかのような布教活動を行った。

無癩県運動により、密告された患者の家には警察官や保健所の職員がやって来て患者を隔離し、家屋を徹底的に消毒するという光景が、人々にハンセン病に対する恐怖を植えつけた。感染者を出した家では、家族も周囲からの差別や偏見におびえなければならなく、そのため家族や親戚との縁を切られた患者や、自ら関わりを断ち切る患者も多くいた。また失望のあまり自殺する者や、周囲の偏見に耐えかねて一家心中する者も後を絶たなかった。こうした国民一体となつての無癩県運動がハンセン病に対する恐怖や差別をより強め、患者から家族や故郷を奪つたといえる。

### 断種・墮胎手術

このような隔離政策に強い影響力を持っていたのが、国立療養所長島愛生園(岡山県)の初代園長となった光田健輔(一八七六-一九六四)であった。医師であった光田はすべてのハンセン病患者を生産にわたって強制隔離する「絶対隔離」を主張し、一九一五(大正四)年からは、患者の逃走を防ぐため、患者同士の間を結ぶことを認めず、患者とその配偶者に断種手術を受けさせた。この時、患者に断種手術を行える法的根拠はなかったが、園もこれを黙認し続けた。光田が断種にこだわったのは、患者の逃走防止だけがその理由ではなく、ハンセン病患者そのものを根絶やしにすることが大きな目的であった。そして光田の主張を後押ししたのが、アジアへの植民地支配を拡大しようとする日本が進めていた「優生政策」であった。国家総力戦に向けて優秀な国民の出生を増やそうとする優生思想のもと、国力増強の妨げとなる結核などの疾病患者や身体障害者、精神障害者とともに、ハンセン病患者を根絶やしにしようとする絶対隔離が実現していった。

戦後間もなく特効薬であるプロミンが国内に普及され、ハンセン病が治る病気であることが実証されるが、それは同時に不治であるとして絶対隔離を正当化してきた光田らの論理の崩壊でもあった。さらに、全国の療養所では入所者が組織する自治会による人権回復運動が活発化し、「プロミン獲得」や「待遇改善」「隔離撤廃」を求め、一九五一(昭和二六)年に「全国国立療養所患者協議会(全患協)」が結成される。こうした運動により「特別病室」などの人権侵害が暴露され、国会においても隔離政策に対する疑問の声が上がりはじめる。しかし、光田など療養所長たちは、さらなる隔離の強化と懲戒・検束権の存続を強く求め、無癩県運動を推し進めていった。その結果、一九五三(昭和二八)年には新法「らい予防法」が制定され、絶対隔離政策は存続されることになる。

このように医学的根拠を全く無視したまま隔離政策は続けられたが、当時これに反対する医師はほとんどいなくなった。しかし京大病院の医師、小笠原登(一八八八-一九七〇)は、ハンセン病患者を隔離する必要がないとして隔離政策を真っ向から批判し、自身の病院においても患者の通院治療を行っていた。これに対し光田ら療養所の医師たちは猛反発し、小笠原の学説を封殺した。

### 人間回復のための闘い

戦後の民主化や経済発展からは忘れ去られるように、その後も隔離政策は続けられるが、その間「全患協」などを中心とした全国の療養所の入所者たちは、社会に根差す偏見や無関心を乗り越えながら、人権回復のための闘いをあきらめなかった。そして、「らい予防法」制定から四〇年以上が経った一九九六(平成八)年、「らい予防法廃止に関する法律」が可決され、一九〇七(明治四〇)年の「癩予防二関スル件」に始まった、九〇年にわたる隔離政策によるやが終止符が打たれた。この法が廃止された当時、全国の療養所の入所者数は約六〇〇〇人、入所者の平均年齢は七〇歳以上、療養所内に残された遺骨は二万三〇〇〇体以上だった。

### 著者プロフィール

「ライは長い旅だから(皓星社)」  
詩/ 檜 雄二(こだまゆうじ)  
一九三三年、東京都生まれ。一九三九年、ハンセン病を発病し、母親とともに国立療養所多磨全生園へ入所。一九五一年、国立療養所栗生楽泉園に転所。一九九九年、原告として東京地裁に「らい予防法人権侵害謝罪・国家賠償請求訴訟」を提起。二〇〇一年、「ハンセン病違憲国賠訴訟全国原告団協議会(全原協)」発足。会長代理。現、栗生楽泉園自治会副会長。主な作品に、詩集「鬼の顔」、詩と写真「ライは長い旅だから」、自伝「忘れられた命の詩」ハンセン病を生き延び、「知らなかったあなたへ」などがある。

### 写真/ 趙 根在(チョウコンザイ)

在日朝鮮人二世。幼少の頃から、岐阜の炭坑で働く。一九六一年頃より、ハンセン病療養所に在日の同胞がいることを知り、栗生楽泉園でハンセン病の患者たちと向き合う生活が始まる。多磨全生園をはじめ全国の療養所に通い、患者たちと糧食をともにする。撮影した写真は二万点以上。一九八一年詩人檜雄二氏と「ライは長い旅だから」を出版。一九九七年、逝去。

※3、4ページ写真は、栗生楽泉園に残されていた胎児標本。

※1 過去や前世に悪いことをした報い。仏教の因果応報思想の影響による。 ※2 天や神仏などに逆らったことによる罰。  
※3 感染力が弱く、患者が同一家族内にあらわれることが多かったため遺伝病と思われていた。  
※4 フランス人神父テストワードによる神山復生病院(静岡県)、イギリス聖公会宣教師ハンナ・リデルによる回春病院(熊本県)、アメリカ長老派宣教師ゲート・ヤングマンらによる慰應園(東京府)、フランス人神父ジョン・マリー・コールによる琵琶崎待劣院(熊本県)など。



信濃毎日新聞連載を単行本化!!

# 五木寛之

特装版

挿画40点入り

# 親鸞

しんらん

混迷の時代に、求められるものとは何か。  
流罪の地・越後で、  
親鸞の新たな物語がはじまる。

激動篇

上下

四六版 上製 各巻330ページ前後  
上・下巻セット  
定価3,360円(税込)

限定  
2,000  
セット

信毎販売店だけで

予約受付中!

完全予約販売

全国44紙・世界最大規模の  
新聞連載小説『親鸞 激動篇』、  
いよいよ2012年1月、  
小社より単行本で刊行!



\*カバーデザインは変更になる場合があります。

信濃毎日新聞社  
(お問い合わせ先)販売局  
〒380-8546 長野市南県町657  
フリーダイヤル 0120・81・4341

『親鸞 激動篇 五木寛之著』上・下巻

ご注文は下記フリーダイヤルへ

0120-81-4341

◎信毎販売店よりお届けします。

※限定2,000セットですので、限定数に達した段階で販売終了となります。

ぎずな  
Vol.3  
2012  
1

長野教区報 ぎずな 2012年1月1日 ●発行 浄土真宗本願寺派 長野教区 〒380-0845 長野市西後町1653 ●印刷 株式会社日商印刷  
TEL:026-234-1796 http://www.1200n.ne.jp/nagano\_bv